

## 山梨県の小学校における「外国語活動」の効果的運営に関する実践的研究Ⅲ

<研究代表者>

高野 美千代 山梨県立大学 国際政策学部

<共同研究者>

石田 一元 甲府市立東小学校

伊藤 ゆかり 山梨県立大学 国際政策学部

池田 充裕 山梨県立大学 人間福祉学部

Peter Mountford 山梨県立大学 非常勤講師

長澤 史 昭和町立西条小学校

目 次

1. 研究の目的 .....	6 9
2. 研究の具体的内容と成果.....	7 2
3. 研究成果報告 .....	7 7

## 1. 研究の目的

東京オリンピック開催を3年後に控えた今、文部科学省からだけでなく、児童の保護者や地域からも様々な要望が寄せられ、小学校英語への期待はますます高まっている。平成23年度よりすべての小学校で「外国語活動」が必修化され、現在では平成32年度に迫る英語の「教科」化へ向けた準備が慌ただしく進んでいる。

「外国語活動」は、児童の英語コミュニケーション能力の素地を育成することを目指しており、これに対する期待と注目度はさらに大きいものとなってきた。その一方で、ほとんどの指導者は英語教育や英語科教授法研究の経験を持たない。しかしながらカリキュラムの作成と運営は各学校において必須となっており、学級担任の主導で「外国語活動」を運営しなければならないため、現場では多くの教諭がいまだに非常に大きな戸惑いや負担を感じている。また、予算面での学校間格差は大きく、教員の研修のチャンスも学校によって異なる。より充実した「外国語活動」を広く実現するためには、解決すべき課題が多く存在している。

この研究プロジェクトでは、現状を踏まえて、山梨県内の小学校における「外国語活動」の効果的運営を実現するために、3つの目標を掲げる。

1つ目は、「外国語活動」の指導者を対象とする研修プログラムを研究・構築し、小学校教諭のためのセミナーおよびワークショップを開催する。この研修プログラムによって、受講者となる小学校の先生方には英語教育に関する基本的な理論を理解した上でALTや補助指導員とのチームティーチングや個人で行う教授方法を修得してもらい、その成果が現場での教育に十分に還元されることをこの研究の最終目標に掲げる。研修プログラムについてのニーズは常に強くあって、私自身、過去に地域で要請を受け、小学校英語教育の研修会で講師を務めてきた経験がある。その際に現場の声を聴き、解決すべき問題を直視してきた。そこで、地域の外国語活動現場の状況を改善するため、平成24年度にセンター共同研究プロジェクトで実施した「山梨県の小学校英語教育における指導者の養成と研修に関する研究」では短期研修プログラムを運営することとした。内容は大変好評であったものの時間数がわずかであったため、より確実な効果を上げるものとして平成26年度に再び新たなプロジェクトに着手した。定期的あるいは頻繁なプログラム開催を求める声に応えるため、平成27年度においては夏と冬2回の講座開催を計画した。受講者の間で非常に評判が良かったので、これを今後も継続したい。

2つ目の柱として取り組みたいのは、地域に合った教材の作成である。文部科学省では、「外国語活動用の教本」以外に各地域の地域性を反映した教材の使用を奨励している。これは、子どもたちに地域の文化歴史を理解させると同時に、今後想定される地域の国際化に対応するために極めて有用となる教材である。山梨県ではこの種の教材が確実に不足しているため、平成26年度は山梨の民話を題材とした英語劇用の絵本を作成した。配付した27

年度には地域の小学校でこのテキストを使った英語劇が上演される例が見られ、新聞にも取り上げられた。さらには、英語教材作成の経験が豊かな外部研究者のアドバイスを得ながら27年度に作成した山梨の地理・地域文化を扱うテキストについてもすでに大きな反響をいただいている。地域教材への要望に応える形で28年度には再度山梨の歴史文化にスポットを当てるような教材の作成を行う予定で準備を進めている。

3つ目として、地域の小学校外国語活動の教育現場での授業および活動サポートを行いたい。山梨県内の様々な小学校と連携して、指導方法を研究実践する。この研究を遂行することによって、教育学系学部を持たない山梨県立大学が、今後継続して地域の英語教育の発展に貢献する可能性を追求し、その最良の形をぜひとも見極めたい。

### 1-1. 事業計画

山梨県内小学校教師と本学教員との共同研究の形態をとる。このような体制で、現在の山梨県内の小学校「外国語活動」の実情に合った指導方法の実践的研究を行う。

#### ①研修プログラムについて

「児童英語教育(Teaching English to Young Learners)」「外国語としての英語教授法(TESOL)」また「英語教師養成(Teacher Training)」の専門家を招き、英語教育におけるメソドロジーの基礎的な部分を扱いながら外国語活動を担当する教員のスキル養成を行い、同時に意識改革と意欲向上をはかる実践的集中講座を開催する。これまで実施してきた研修プログラムが大変好評であるため、夏と冬の2回にわたって講座を提供する。

#### ②地域に合った教材の作成

他の都道府県で作成し使用している教材を研究しながら、山梨に合った内容の教材を作成する。そのため、資料収集、出張を伴う情報収集、打ち合わせ等を行いながら進める。子供が興味を持つような内容であることはもちろん、将来的に役に立つ表現・語彙・語句を身につけられるものを目指す。また、子どもたちが題材にアプローチしやすいよう冊子の編集にも力を入れ、昨年度同様に専門家のアドバイスを受けながら丁寧に作業を進めたい。29年3月の完成・配布を目指す。

#### ③外国語活動運営サポート

平成26年度は、本学で英語科教職課程を履修している学生を、アシスタントティーチャーとして現場に派遣して、実践的研究を行った。アシスタントを求めている教育現場と、教育経験を積みたいという学生との間でまさにウイン・ウインの関係が成立し、サポート業務は大成功であった。国際政策学部の学生の中には児童英語教育に興味を持ち、個人的に研究を進めている学生もいるため、優秀な学生に地域で貢献する機会をこの研究の中で提供したい。また、人間形成学科で小学校教諭を目指す学生にも協力を得られたらと考えている。サポート業務を実現するには、受け入れ側と送り出す側との様々な条件が一致しなければならないため、予定通りには進まない場合も考えられる。しかし、チャンスがあるときにす

ぐに対応、実現ができるように、小学校英語のアシスタントティーチャーを務めることができる学生の教育・養成を県立大学側で進めていきたい。

以上の3点に取り組むにあたり、小学校英語教育の充実で知られる小学校の協力を得て、授業の運営方法、教材の提示方法など現地調査を行う。プロジェクトメンバーが現地を訪問し、低学年から高学年までの授業を実際に参観するほか、担当教員との勉強会を実施する。

## 1-2. 研究年度計画

### ①研修プログラムについて

小学校英語教育に携わる方を対象として、年間2回の無料セミナーを提供する。実際に小学校の英語教育現場での教授経験が豊かであり、かつ学術的な裏付けのある講師を招く。プログラム内容は講師とともに丁寧に検討を行うが、さらに効果的な研修内容を模索するために我々プロジェクトメンバーも実際に小学校英語の授業を視察し、知見を得ることとする。さらに、地域の小学校教諭の意見もプログラム構築のヒントとして取り入れる。

### ②地域に合った教材の作成

山梨の歴史文化を子どもたちが学べるような内容の教材を作成する。そのため、資料収集、出張を伴う情報収集、打ち合わせ等を行いながら時間をかけて進める。29年3月の完成・配布を目指す。

### ③外国語活動運営サポート

今回の研究では研究会メンバーのみならず、本学で英語科教職課程を履修している学生を中心に、学生のアシスタントティーチャーを現場に派遣して、実践的研究を行う準備を進める。国際政策学部の学生の中には児童英語教育に興味を持ち、個人的に研究を進めている学生もいるため、優秀な学生に地域で貢献する機会をこの研究の中で提供したい。学生にはセミナーへの参加の機会を提供するなどしながら丁寧に体制を整える。

## 2. 研究の具体的内容と成果

### 2-1. 小学校教員対象研修プログラム講座準備・勉強会

本プロジェクトの柱の一つである小学校教諭対象の英語研修会を2度開催することができた。昨年度と同様に、日本人教員だけでなく、実際に現場で教育に携わるALTをも対象に含め、具体的には第1回目を次の要領で行った。

日時：2016年7月2日（土）午前9時～12時

場所：山梨県立大学飯田キャンパス C館 102 教室

講師：Brian Byrd 先生、藤原真知子先生（聖学院大学、聖学院小学校講師）

講座内容：Stories, Songs, and Games for Elementary School Students

受講対象者：小学校教諭、ALT

参加費：無料

第1回目は日常の授業ですぐに取り入れられる短時間でのアクティビティ等を中心にし、第2回目は注目されつつもなかなか導入が簡単ではない CLIL をわかりやすく扱うものとして、つぎのように実施した。

日時：2017年1月28日（土）午前9時～12時

場所：山梨県立大学飯田キャンパス C館 102 教室

講師：Brian Byrd 先生、藤原真知子先生（聖学院大学、聖学院小学校講師）

講座内容：Teaching Classroom Subjects in Simple English

受講対象者：小学校教諭、ALT

参加費：無料

いずれの回も20名ほどの参加者があり、山梨日日新聞の記事で内容が紹介された。2回とも講師を二人招いているが、教室でたびたび必要になるチームティーチングの模範を示す意味もあり、参加者にとっては非常に有益である。チームティーチングは、小学校の先生方がおそらくもっとも難しいと感じることのひとつであろうし、山梨県内でこれほど卓越した例を間近に見ることは不可能であろう。この点だけでも本セミナーは非常に高い価値のあるものと言える。

### 2-1-1. 参加者からのフィードバック

以下に今年度のセミナー参加者からの声を一部紹介する。

#### 2016年7月のセミナーに参加して

様々なアクティビティを紹介していただき、授業で実践してみようと思いました。ブライアン先生と真知子先生の息の合った進め方も、自分がALTと授業を組み立てていく際の参考になりました。

小学校は学年ごとに児童の実態が変わるので、どの学年にも応用できる指導方法を紹介してもらい、大変有難いです。

音声に集中して学べるアクティビティが多いので、子どもたちはローマ字的な読みから離れて自然な発音を身に付けられると思います。

他教科の内容を外国語活動に取り入れる方法がとても良いと思います。参考にさせていただきたいと思います。

とてもリラックスした雰囲気の中で、私たち教諭もこのように英語を聞いて英語を話す機会を得られ、英語のリズムに慣れることができました。そして、外国語活動に取り入れていくアイデア、メニューをいただけて有難いです。

#### 2017年1月のセミナーに参加して

実践に生かせる内容で有意義な時間でした。英語強化地域に勤務し、不得意ながら推進担当をしております。まだまだ小学校内では英語を担当する事に消極的な教員も多いのが現実です。推進する立場にいる私としては、板挟みにあっている状態も否めません。しかし、この講座においては講師の先生方のなさるアクティビティを学び、英語を聞く機会が得られます。また、先生方による実演があり、英語は楽しい活動なのだということを思い出させてもらえます。大変貴重な機会です。教科化は少し先ですが、弱音を吐かず、取り組んでいきたいと思いました。

個人でブリティッシュカウシルの講義を受けましたが、高価でなかなか続けられません。このように県で支援して下さると、現場に教師として立つ者として、勇気を頂ける講座です。今後ともよろしくお願いします。

小学校英語では様々な工夫がされていて、今日参加してみて驚きました。物語など小学生もしているようなものに音をつけるだけで児童によっては教材になるので自分でも作ってみ

ようと思いました。

子どもたちが学ぶことを英語で改めて学ぶという経験はとても良いと感じました。たくさん実践例を知り、今後に生かしたいと思います。

今1年生の担任をしているので、おむすびころりんを今度やってみようと思います。

英語の授業ってどうすればよいのか、という不安がありました。教師が楽しくすることが大事だなと実感しました。

GLIL というのは、聞いたことはありましたが、家庭科や図工だったので、理科でできるのはとても素晴らしいと思いました。

紙芝居は字がないので工夫して使えると思います。リズムよく、繰り返しの表現を行うと子どもたちは喜んで覚えてくれそうです。一緒に楽しく歌いたいです。

アイデアや工夫で楽しい英語の活動ができると思いました。

今回で4度目の参加です。前回の復習もできて良かったです。土曜日の半日で参加できるこのセミナーはとてもありがたいです。都合がつく限りまた参加させていただきたいです。

身体表現、簡単な英語、定着の回り方、自国の要素…これらの総合的なものがとても良いヒントとなり、これからの外国語活動の授業の糧になります。

英語でのビンゴのやり方など「一部分だけでも取り入れていけばできるようになりますよ」という言葉にホッとする思いでした。

初めのほうで紹介していただいた Everybody Jump! は、一年生にちょうど指導した単語だったので、楽しく覚えられそう、すぐ使えそうだと感じました。

歌や様々なアイデアを勉強でき、楽しかったです。小学校の授業では、カリキュラムがすでに組み込まれており、自由に指導案を作れませんが、休み時間の英語活動やクラブの中で早速使ってみたいと思います。

子どもたちが英語で日本の文化を発信できるようになるような内容でとても参考になりました。またぜひ参加したいです。



Use of natural rhythm and beat is very useful for children. It is also very helpful for ease of memorization for teachers.

Enjoyed Omusubi Kororin the most. It was probably the easiest to get into, and kids would certainly enjoy using different voices for characters and gestures for actions.

Will be using the Let' s Make Rice Balls lesson next week. Today was a good review/practice session for it!

Very fun, active and educational. All the activities are useful and fun for the children to learn. I love learning new ideas.

I wish you had the books especially the 26 Fun Song Book available to buy to take home today.

以上のように、参加者全員がポジティブな感想を寄せている。明日の授業につながる知識やアクティビティのアイデアを、参加者に対して本講座が提供しているとわかる。

## 2-2. 地域教材の作成

平成 26 年度に引き続き、平成 27 年度の山梨県立大学地域研究交流センタープロジェクトにおいて、英語学習のための山梨県の地域教材を作成した。教材は *Yamanashi English* と題するもので、山梨県の文化、地理、民話等を取り入れて作成した。平成 28 年 4 月より、山梨県内の小学校その他への配布を行った。意外にも小学校以外からの反響が大きく、地域における英語学習への関心あるいは「英語で地域を紹介すること」についての関心が高いことが感じられた。

そこで今年度も地域教材作成に取り組み、ますます国際化する地域社会で英語による文化発信を促進するような教材の開発を試みた。

### 2-2-1. 教材作成の手順と教材内容

今年度は山梨の歴史文化を伝えるものとして、やさしい英語で書き直したむかしばなし教材 (*Little Gems of Yamanashi*) を作成することとした。判とページ数は前回好評だった教材に準じて、A5 判、40 ページ程度と想定した。一つのお話につき 2~4 ページを目安とし、支給された研究費の中で行うため本文はモノクロ印刷とした。イラストは独自に作成し、写真は手分けして撮影を行うなどした。

むかしばなしは、山梨の民話を扱う二冊の本から選定した。留意した点は、県下の多くの子どもたちが身近に感じられるように、山梨県内の様々な地域からの話を取り入れるようにしたこと、異なるタイプの話を取り入れ興味を引き出すようにしたことが挙げられる。取り入れたお話は、金のぼたもち、竜王水の話 (りゅうおうのおはなし)、お金井戸、善光寺の棟木、タンスの中の田んぼ (まほうのタンス)、みそ汁の力、猿橋、富士山と八ヶ岳、おけさギツネ、以上 9 編である。富士山と八ヶ岳は 2 つのバージョンを作成して並列した。

選定した後で教材作成メンバーを決め、まずは日本語の話を読み、英語の下訳を作っていた。今回は学生もメンバーに加え、内容を整理して英語訳を作り、検討を進めるという作業を行った。最終的には聖学院のブライアン・バード先生に全体の構成やより明瞭な英語表現等についてアドバイスをいただいた。今年度は教授用資料を作成するまでには至らないため、その作業は次年度に回すとして、教材が納品された後には 29 年度の小学校英語教育に活かしてもらえるように県内各学校を中心に配布したい。

### 3. 研究成果報告

#### 3-1. 小学校英語教育現場視察報告

はじめに

グローバル化が進む中、英語教育の改革が進められている 2020 年（平成 32 年）からは小学校における英語教育の拡充強化、中学・高等学校における英語教育の高度化など、新たな英語教育が本格的に実施されることになっており、現在はその準備段階である。

##### 1. 現状分析：「外国語活動」から「英語科」へ

小学校外国語活動は、2011 年度（平成 23 年度）から「領域」という位置づけで、小学校高学年において年間 35 時間（週 1 コマ）実施されている。目的は、コミュニケーション能力の「素地」を養うこと、言語・文化を「体験」させることを通じて、英語によるコミュニケーションへの積極性を養うことにある。主に 2 技能（listening and speaking）を用いて、英語の音声や基本的表現に慣れ親しむというのが小学校英語の目的である。一方、中学校英語では、コミュニケーション能力の「基礎」を養うこと、言語・文化を「理解」させることに重きが置かれ、英語の 4 技能（listening, speaking, reading, writing skills）の養成がなされる。つまり、これまでの小学校英語教育は、中学と比較しても明らかなように、2 技能に限定された範囲内での指導が求められてきたのである。

現行の学習指導要領では、外国語活動の目標を「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」とし、外国語活動においては、次の 3 つの柱を踏まえた活動を行うことで、コミュニケーション能力の素地を養うこととしている。

- ① 外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。
- ② 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- ③ 外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。

以上のような目標を掲げて実施されてきた外国語活動に、大きな変化が提案されている。2020 年に新学習指導要領の全面実施がなされるのに合わせて、小学校英語教育の改善・充実が行われることになった。最大の焦点は小学校高学年における英語の「教科」化である。「英語教育の在り方に関する有識者会議」報告の概要（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/1352460.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/1352460.htm)）によれば、教科型（英語）においては、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーション

を図ろうとする態度の育成を図り、身近で簡単なことについて外国語の基本的な表現に関わって聞くことや話すことなどコミュニケーション能力の基礎を養う」ことがターゲットとされる。コミュニケーション能力の「基礎」を養うという部分は、現在では中学英語の目標とされているものである。新たな小学校英語の指針においては、読むこと、書くことを含めた初歩的な英語の運用能力を養うための4つの目標が示されている。

- ① 身近で簡単なことについて話される初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解することができるようにする。(聞く)
- ② 身近で簡単なことについて、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。(話す)
- ③ アルファベットや単語に慣れ親しみ、英語を読むことに対する興味を育てる。  
(読む)
- ④ アルファベットや単語に慣れ親しみ、英語を書くことに対する興味を育てる。  
(書く)

授業時間数は、高学年において現在の2倍となる年間70時間に増加される。コミュニケーション能力の「基礎」を養うという点で、中学の前倒しの感は否めないが、言語を教えるときに4技能を扱うのは不可欠であるから、これについては小学校英語教育の改善につながるものと期待することとしたい。目標は、身近で簡単なテーマについて、初歩的な英語で簡単なスピーチをすることができることとし、さらにアルファベットの文字や単語等の認識を深めることも含まれた。具体的には、日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴や語順に気づいたりする活動を行うと言及されているため、中学英語との円滑な接続を意識した内容となっていることがわかる。

また、中学年には「外国語活動型」が導入され、現行の外国語活動と同様に、年間35時間(週1コマ)が設定され、ALTなどの外部人材を活用しながら学級担任が主に指導することとしている。活動型、年間35時間、コミュニケーション能力の「素地」を養うという点で、現在の5・6年生を対象とする外国語活動と同じことになる。こちらも前倒しのように見える。中学年の外国語活動における具体的な学習目標は、自分や身の回りのごく限られたことについて、自分の気持ちなどを伝えようとするということで、たとえば挨拶、自己紹介、買い物、食事、道案内などに必要な語句や表現を練習し、習得する。授業は主に学級担任とALT等のチームティーチングが基準とされる。

現行の外国語活動の指導においては、学級担任が主要な役割を果たしている。たとえ英語の発音や運用に自信が持てなくても、外国語活動教材の「Hi, friends!」を使いながら、ALTの補助を得つつ、CDなどの教材を活用して、自らが「英語を話すモデル」を務める。児童は、外国語活動での体験を通して「英語が話せた。できた。」という成就感や達成感を味わい、人前で英語を話したり、外国人とコミュニケーションを取ったりすることに抵抗がなく

なるなど、積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度が育成されてきている。また、評価については「教科」ではないので、活動内容やそのときの児童の様子を文章で記述している状況である。

今後、教科化に伴い「英語科」となると、高学年では、検定教科書を使いながら、身近な事柄について聞いたり話したり、文字や単語を読んだり書いたりする学習が想定される。また、評価についても「～ができる」という具体的な学習到達目標を設定し、効果的な指導を行い、児童の達成度を評価することになる。その際は、インタビューやスピーチなどにおけるパフォーマンス評価も行い、数値による評価を示す必要も出てくる。

このように、「外国語活動」と「英語科」では目標、指導、評価の内容や方法等が大きく異なる中で、小学校の段階から、子どもが「英語嫌い」にならないような授業づくりや指導と評価の工夫が必要であり、そのためには、教師の指導力の向上を図る必要がある。実際には小学校教員が中学校英語二種免許を取得するための認定講習が全国各地で始まっている。また、各地の教育委員会や総合教育センターにおいても、小学校教員の外国語に関する専門性を高めるために、さまざまな研修が計画されている。このような機会を有効に活用し、小学校の学級担任が、英語の指導力に関する専門性を高めるとともに、併せて専科指導を行う教員を適切に活用することで、より専門性を重視した指導が可能になる。

また、小学校外国語活動の充実により、中学校の英語の学習において、生徒が「聞くこと」「話すこと」に抵抗なく取り組むことができるようになってきている。その一方で、音声から文字への学習や文字や単語を書く学習、文構造の学習に困難さを感じ、つまづいてしまう生徒もいることが課題である。そこで、小・中の教師が、相互に授業参観を行うなどして、中学校の教師は、小学校では何をどのように学習しているのか、小学校の教員は中学校の学習につなげるためにできることは何かを意識したうえで英語教育に取り組むことができるよう、小学校と中学校との連携を図ることが求められる。

## 2. 教科内容を取り入れた小学校外国語活動の実践例～CLILの実践～

### (1) 日本の小学校英語における CLIL の実践について

東京都内のある私立小学校における CLIL 実践例をここで紹介したい。その小学校では、教科として全学年で週2コマ英語を教えている。授業を行うのは、英語を専門に教える日本人講師と外国人講師である。英語のカリキュラムや教材は CLIL を含め、教師が独自に開発したものを使用している。

この学校では2、3、4年生の授業を参観したが、公立小学校の児童に比べると、子ども達はとても英語に慣れている様子であった。さらに、2技能に限らず、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの4技能が身に付いていると見受けられ、授業では、英語の教材を読んだり、英語の歌を歌ったり、ノートにアルファベットを書いたりすることに積極的に取り組んでいた。

2年生のクラスでは、“Simon says”のゲームを効果的に取り入れていた。子ども達の知らない単語が出てきたときには、教師はジェスチャーを使いながら、推測させ、単語と意味を結びつけ、何度も言わせるような取り組みをしていた。子ども達は遊びの中で、楽しみながら単語を覚えているようだった。

CLILの実践についていえば、この学校では低学年の生活の授業で扱うアサガオの栽培や3年生の理科でのチョウの一生を英語の授業に取り入れている。具体的には、子どもたちにとっておなじみの童謡あるいは唱歌などを利用して、それに英語で歌詞をつける。こうして、語彙や表現を歌で覚えさせ、定着させるのである。さらに別の方法としては、子どもたちをグループに分け、アサガオやチョウの一生を劇で表現させたり、絵本を作らせたりしている。子どもたちは日本語ですでに学んだ内容を英語で復習し、知らず知らずのうちに英語で理解する、あるいはさらに興味を持つきっかけを得るのである。3年生のクラスを視察した際には、子どもたちが理科で学ぶチョウの一生を、英語で扱っていた。教師はチョウが成長する様子を歌に乗せ、ジェスチャーを付けながら、ことばと意味を結びつけるように教え、子どもたちは教師を真似て、歌とジェスチャーを繰り返し練習していく。語彙的には、日本の学校では通常扱わないものも含まれるが、チョウの成長を表現するのに不可欠な語は積極的に取り入れ、子どもたちも覚えようとしている。たとえば、「さなぎ」を意味する“pupa”がその例である。その後、教師が「はらぺこあおむし」の絵本を使って英語で読み聞かせを行い、子どもの理解を深めるようにしていた。担当教師の話では、チョウだけでなく、トンボやカエル的一生も学びたいという要望が子どもたちから出されるとのことであり、CLILの成功例の1つであると言えよう。



読み聞かせの様子



授業風景

(3-1. 主執筆者：長澤史)

### 3-2. 地域教材の作成と提案

山梨県の小学校英語教育の効果的運営に関して研究を進める中で、私たちは地域教材について検討し、教材を開発してきた。ここでは新たな可能性として、短いアクティビティを提案したい。

#### Yamanashi Folk-Tales: Gongen-take and Fuji-san

Dramatising the Yamanashi folk-tale of Gongen-take and Fuji-san fighting over who is the highest mountain poses various problems from the point of view of elementary school classes since they often contain 30 pupils. The principal problem is that there are very few actors in this story, and one of them (Amida) doesn't say much. Here I have adapted the tale of Gongen-take and Fuji-san considering its use as a recitation accompanying kami-shibai (story-telling with theatrical illustrations), or as a chant. As with singing songs in English, there are no specific syllabus targets of a chant or recitation, rather the objective is to familiarize the performers with English, and English pronunciation, through the use of a rhythmical and up-tempo context. Clues to the meanings of the words, and of the story, should be provided by pictures drawn for kami-shibai, or by actions directed by a teacher conducting a chant. The story is told in five verses. Assuming a class of 40 pupils, one verse each could be given to 2 han to memorise for a performance. Alternatively, each verse could be broken into two couplets which 1 han would be tasked to perform. The chorus is provided to keep every child involved.

#### Gongen-take, Fuji-san

Which is the highest mountain in Japan

Once upon a time, a long long time ago

Gongen and Fuji had a big row

“I'm taller than you,” Fuji-san cried

“No, I'm the tallest,” Gongen replied

#### Gongen-take, Fuji-san

Which is the highest mountain in Japan

They shook the ground; they made smoke and fire

They made such a noise over who was the higher  
Day after day, they fought like this  
The people of Kai, they only wanted peace.

Gongen-take, Fuji-san  
Which is the highest mountain in Japan

Fuji and Gongen ignored the peoples' plight  
The people prayed to Amida to stop the mountains' fight  
Amida was a goddess who had a lot of power  
And Fuji and Gongen had to bow to her

Gongen-take, Fuji-san  
Which is the highest mountain in Japan

Amida cut a bamboo, and put it on their heads,  
Poured water in the middle, and watched the way it spread  
The water ran to Fuji, to Gongen's delight  
He was the highest; he'd won their silly fight

Gongen-take, Fuji-san  
Gongen is the highest mountain in Japan

Fuji-san was jealous, and couldn't control her rage  
She kicked the taller Gongen and broke him into eight  
Now he is smaller, and though he keep's name  
He isn't even the highest in the Yatsugatake Range

Gongen-take, Fuji-san  
Fuji is the highest mountain in Japan

さらに、上記のアクティビティの簡易版をつぎに提案する。

There are four players in this song: People, Amida, Fuji-san, and Gongen-take. Each has eight lines to recite or sing. The lines can be sung to the tune of Brother Jack. Illustrations, kami-shibai, or other dramatic enhancements would help to explain the



stories for a performance. In particular, verse 5 is difficult to understand without prior knowledge of the story, and needs a couple of illustrations.

1

(People) Fuji-san, Fuji san

How tall are you, how tall are you

(Fuji) I am the tallest, I am the tallest

Mountain in Japan, mountain in Japan

2

(People) Gongen-take, Gongen-take

How tall are you, how tall are you

(Gongen) I am the tallest, I am the tallest

Mountain in Japan, mountain in Japan

3

(Gongen) Look at me, look at me

I'm taller than you, I'm taller than you

(Fuji) Don't be so silly, don't be so silly

I'm the tallest, I'm the tallest

4

(People) Amida-san, Amida-san

Please stop their fight, please stop their fight

We can't work in the day, we can't work in the day

We can't sleep at night, we can't sleep at night

5

(Amida) Split bamboo, split bamboo

Put it on their heads, put it on their heads

Pour water in the middle, pour water in the middle

Watch where it spreads, watch where it spreads

6

(Gongen) Ha ha ha, ha ha ha

I am dry, you are wet

I am the tallest, I am the tallest  
Mountain in Japan, mountain in Japan

7

(Fuji) I am angry, I am wet  
I can't bear - to be second-best  
Smash your head into eight, break your top into eight  
I'm the tallest, I'm the tallest

8

(Amida) Long ago, long ago  
Gongen-take - was the tallest  
Fuji broke him into eight, Fuji broke him into eight  
Yatsugatake, Yatsugatake

これらのアクティビティを教室で使用する場合には、学年やクラスサイズによって何をどれだけ使用するか、教師の判断が必要となる。ALT のアドバイスを借りてさらに容易な表現、短いアクティビティに変えるのも効果的であろう。

(3-2 主執筆者：ピーター・マウントフォード)

## まとめ

今回のプロジェクトは 3 年目となり、本来小学校英語教育を専門としない私たちも徐々に小学校英語教育現場の状況を知り、その変化・動向について正確な情報を素早くとらえ、理解を得ることができるようになってきた。昨年度同様にマスコミや地域社会においても高い関心が持たれていることが分かり、近年の英語教育変革については学校教育現場以外でも大いに注目を集めていることが明らかとなった。

例年重視している 3 つの活動（小学校教諭対象セミナー、外国語活動支援、英語教材作成）については、それぞれ満足のいく形で成果を上げることができた。とくにセミナーと教材作成については非常に良い手ごたえがあった。すべて多くの方々の理解と協力があって実現したことであり、感謝の気持ちでいっぱいである。

2020 年の東京オリンピックを見据えた「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」は、学校教育現場に対して大きな課題を提示しているし、小学校英語の教科化もいよいよ間近に迫り、とくに公立小学校では戸惑いも広がっているだろう。このような状況において、私たちも試行錯誤をしながら山梨県内の小学校英語教育の底上げ、発展につながるような活動を継続してきた。教育学部のない大学の、英語教育を専門としない教員が中心となって行う試みではあるが、地域の要請がある限りは公立大学として地域に貢献するこの取り組みを遂行する意義があると考えている。

以上

研究代表者  
国際政策学部 高野美千代